



空想

昨日、友人と私はアムステルダムを中心街でとある書店にいた。秘教のブックコーナーの前に立ち、グルジェフとウスペンスキーの著作を探しながら、友人は突然こう言った。「こいつはみんな空想だな。おい、見てみるよ。」

目の前には大量の本が並んでいたが、その内容に私たちは面食らっていた。UFOの着陸とその隠蔽工作、夢のコントロール、守護天使との交信等々についての本、本、本—あらゆる形と色の何百冊という研究書と書名がずらりと並んでいたのである。とりとめもなくページをめくりながら、私たちはこうした本の価値について忌憚なく意見を交わし、結論として分かったのは、こうした本が読者たちをさらに深く(空想)、非現実の世界へとひきずりこみ、自分の真の自己からますます遠ざけてしまうだろうということであった。

空想には二つの主な意味がある。ひとつは「創造的な」空想である。それはケーキや絵画、吊橋など、何かを創造する際に必要になるものである。だが、第四の道では、空想という言葉はある特有の意味で使われている。ここでいう空想とは、現実には存在せず、ゆえに決して在りえない物事についての思考で頭脳があふれている状態を指している。ウスペンスキーはこの状態のことを「制御されていない知的活動」と呼んでいた。空想は一見して無害に思われるかもしれないが、それは、自分の人生の現在という瞬間に存在し、自分の存在を真に体験する可能性をむしばんでしまう。もし第四の道の理論を信じるなら、こうして失われる可能性は本来魂を生み出すための基礎となるべきものなのである。

私たちの頭の中は、現実との関係がほとんど、あるいは全くない映画を絶えず上映している映画館のようなものである。私が今「現実とほとんど関係がない」と言ったのは、多くの場合、空想というものが現実のごく小さな側面を反映して起こるからである。馬鹿げたことだが、実際にギターを二、三分演奏できれば、私たちは自分が次のエリック・クラプトンになれると空想してしまう。「本当に我々は自分のことを空想している。」ウスペンスキーはそう語っている。「そして我々は、自分が空想しているのとは全く違う人間なのである。」さらに悪いことには、私たちは時間の多くを「否定的空想」にふけることに浪費している。否定的空想は不健全な、自分で自分を苦しめる状態であり、私たちは災難や屈辱、疾病について思い浮かべて悩み、自動車事故や就職面接での失敗、真夜中に不審者が窓から侵入してくる恐れなどを空想するのである。

私自身これまでいつも、直後の将来について絶えず空想している自分を観察してきた。たとえば、家から出かけるときは、私は自転車が盗まれていないかという空想に陥り(そんなことは一度も起こったためしがないのに)、次に、路面電車の停車場まで自転車で向かいながら、電車に間に合わないかもしれないとか、仕事に遅刻するのではとか空想するのである。さらに路面電車に乗れば、カレッジへ歩いていく道すがらについてあれこれ空想し、同僚がどのように挨拶して自分に対応してくれるか等々について空想するのである。空想はいつも過去や未来に関するものであり、決して現在の瞬間に関するものではない。この心理的なエスカレーターから降りて、現実に戻る方法を見出さないかぎり、私たちの人生にはすべて空想が織りこまれてしまうだろう。私たちは、現在に存在しなければならない。

自分の内面で空想の状態を見きわめ、そのあるがままの姿を理解すれば、次に生じる問題はその状態からどのように逃れるかである。そうすれば、師をもち、空想と闘うツールを使ってワークしている人々を見出す必要性を悟るであろう。ある観点から言えば、目覚めとは空想から自由になることであり、その瞬間に自分の身の回りで実際に起こっている出来事に敏感になることである。その時点で初めて、自己に対するワークが始まるといえる。ウスペンスキーの言葉が想起させてくれるように、「眠りの状態でできるワークなど存在しない」のだから。

アラン・バーンサイド